



Yumeハブ合宿で講演する川崎会長



ワークショップの成果を共有

2019年度は、2018年度の取り組みのレビューを踏まえて、Yume Proに関するグループ内の認知と理解を一層高めるため、経営トップによる「Yume Proフォーラム」を各地で開催し、約1,000名の社員が参加する予定です。

また、部門ごとにイノベーションのエバンジェリストを育成する「Yumeハブ」を開始しています。

2019年10月4～5日にホテルフクラシア晴海において、Yumeハブ・メンバーとイノベーション推進部、IoTビジネス開発室、IoT-AP推進部、研究開発センターが合宿を行いました。川崎会長から、OKIグループとして何故Yume Proに取り組むのか、トップマネジメントのビジョンと戦略に関するプレゼンを踏まえ、Yume Proをグループ内に広め、どの様に定着させていくかについて討議しました。



Yumeハブ合宿にて川崎会長を囲んで

OKI 沖電気工業株式会社

お問い合わせ先

経営基盤本部 イノベーション推進部

〒105-8460 東京都港区虎ノ門1-7-12 (虎ノ門ファーストガーデン)

電話:03-3501-3821 https://www.oki.com/jp/yume_pro/



Vol.3-1 2019. October

https://www.oki.com/jp/yume_pro/

Yume Proチャレンジ大賞「AIエッジロボット」がCEATECに登場

人手不足業界の省力化を目指す

2019年4月に行われた社内アイデアコンテスト「Yume Pro チャレンジ2018」で大賞を獲得したAIエッジロボット。日々、深刻化する人手不足という社会課題を解決するソリューションが、受賞後半年間でCEATECに登場しました。

このアイデアの原点は、共創パートナーの施設点検、防犯・見守り、倉庫の在庫チェックといった分野の人手不足が解消できないかという課題認識でした。そこで出てきたのが、ロボットと人間の協調作業により、人間一人で複数のロボット

を遠隔操作することで省力化に貢献するアイデアです。そのためには、人間では見逃しがちな監視ポイントをロボットにより360度俯瞰し、ロボットでは対応が難しいきめ細かな作業を人間が遠隔で行う必要があります。そこで、AIエッジロボットに多様なセンサー機能を柔軟に具備し、状況把握をリアルタイムに行います。また、直感的に操作し易いユーザーインターフェースにより、警備などの現場効率を倍増することを目指します。

AIエッジロボットと遠隔運用コックピット



※1 フライングビュー®: 自由視点の俯瞰映像モニタリングシステム。沖電気工業株式会社の登録商標。
※2 LiDAR (ライダー): Light Detection and Rangingの略。光検出・測距技術

多様なユースケース例



シーン：施設点検
ガス漏れ発見
メーター異常検知など

シーン：防犯、見守り
要救助者や不審者を検知し
AIが適切に判断

シーン：搬送や品出し
商品の在庫チェック
商品搬送など



OKI AIエッジロボットの特徴

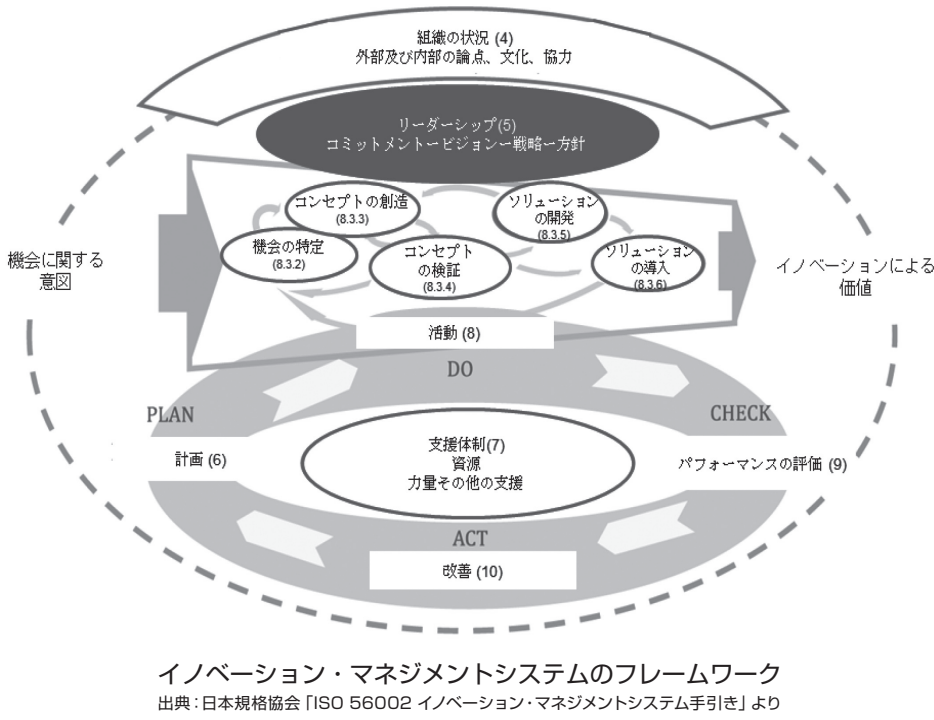
OKIのAIエッジロボットは、管理対象の施設を360度視点でリアルタイムに俯瞰できるAI機能を搭載。自律的に広範囲な施設の監視を可能とします。また、ロボット単独では作業が難しい状況ではオペレーターが遠隔でロボットを制御することで高度な対応が可能です。

これにより、オペレーター一人で約10台程度のロボットを同時に遠隔制御することで生産性を高めることができます。

国際標準 ISO 56002採択

OKIは、2017年度から、鎌上社長のリーダーシップの下で、グループ内に新たなイノベーション・マネジメントシステム (IMS) の策定、導入、定着、改善等を行う活動を進めています。これは、2019年7月に発行されたIMSの国際標準 (ISO 56002) を先行的に導入し、定着・浸透を図る取り組みです。

OKIイノベーション・マネジメントシステムは、ブランドスローガン「Open up your dreams」にちなんで「Yume Pro」と命名しています。



イノベーション・マネジメントシステムのフレームワーク
出典：日本規格協会「ISO 56002 イノベーション・マネジメントシステム手引き」より

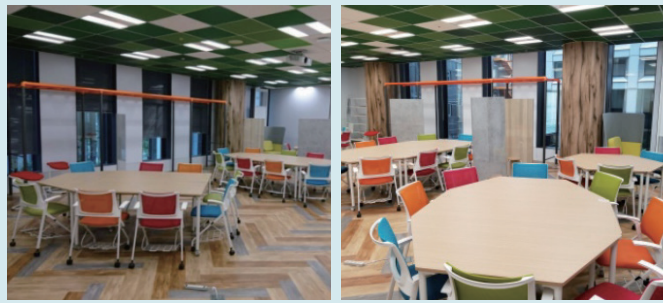
国際標準準拠の取り組みYume Pro

OKIグループは、1881年の創業以来、社会課題解決を柱として事業を行ってきました。これを受け、Yume Proは、国連が定めた持続可能な開発目標 (SDGs) 実現への貢献をビジョンとして掲げています。

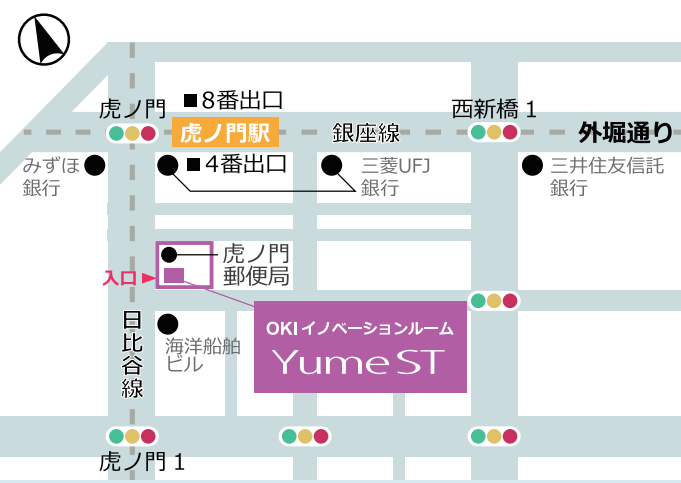
また、ISO 56002において指摘されるように、イノベーション活動を促進するためには、社内文化改革が重要です。Yume Proでは、創業者が掲げた「進取の精神」に立ち返るべく、2018年度から5年間で、イノベーション・パートナーとしてのブランドを確立することと併せて、イノベーションが日常的な活動となる社内文化を実現することを方針に掲げています。

YumeST(夢スタ)のご案内

OKIのイノベーション活性化の拠点として、OKIショールームに隣接する場所にイノベーションルーム「YumeST(夢スタ)」を開設しています。ぜひお立ち寄りください。



イノベーションルーム Yume ST(夢スタ) OKI虎ノ門本社2階



東京都港区虎ノ門1丁目7番12号 虎ノ門ファーストガーデン2階

ISO 56002の採択を受けて、経済産業省は、企業向けガイダンス「日本企業における価値創造マネジメントに関する行動指針」を2019年10月に発表しました。この行動指針策定に際して、OKIの川崎会長は、経済産業省のイノベーション100委員会に招かれ、Yume Proを主導している経験を踏まえて提言を行いました。

川崎会長発言を紹介

行動指針の中で川崎会長の以下の発言が紹介されました。

「市場そのものが変わるので、CEOそのものが変わらなければ決して守護神にはなれない。やはりものすごく熱い思いを持っている。神ですから、ある意味では。守護神としてリードする場面もあれば、大きな懷で守る場面もある。」

「ただ2階建てにすればいい訳ではない。経営者が先頭に立って全社教育を行い、理解を浸透させて1階のリソースで2階を支援する体制を作ることが必須だ。」

「お客様とお互いのSDGsへの取り組みを話し合う。お互いの課題を共有し、協力して解決しようという現場での地道な対話が、事業機会にもつながっていく。」



イノベーション100委員会でのコニカミノルタ山名社長(左)とOKI川崎会長

企業の挑戦事例にOKIの事例を紹介

また、ガイダンスの行動指針9「価値創造活動においては、小さく早く失敗し、挑戦の経験値を増やしながら、組織文化の変革に取り組む【組織経験】」の中で、OKIの事例が紹介されています。

【沖電気工業株式会社】
イノベーションが日常的な活動となる社内文化改革を図るため、イノベーション・マネジメントシステム「Yume Pro」を導入。試行錯誤を高速回転させるイノベーション創出活動と社内文化改革を車の両輪で進める。

- ✓ 2017年、イノベーション推進プロジェクトチーム (PT) を設置し、組織の現状と課題を分析。社長とPTの膝詰め論議を経て、ISO 56002を先取りしたイノベーション・マネジメントシステム「Yume Pro」を立ち上げる。プロダクトアウトではなくSDGsに掲げられた社会課題から事業機会を発掘し、試行錯誤を高速回転する「Yume Proプロセス」でイノベーション創出に取り組む。
- ✓ イノベーション・チーム (2階) と既存事業部 (1階) 間で密接な連携を図れるよう、キーパーソンをイノベーション推進部に配置。PoC予算はイノベーション推進部が持ち、事業部に発注する形にすることで連携を図るなど、新たな事業を事業部に円滑に移行できる仕組みを導入。
- ✓ イノベーションの必要性を社内に浸透させ、イノベーション・チームに対する社内の支援体制を確立するため、社内文化改革を進める。社内にOKIイノベーション塾を立ち上げ、社内で1000人研修を開催。研修は、経営層・部門長・部長と上から展開することでグループ内に浸透を図る。非イノベーション部門も参加し、既存事業の革新とエッセンスの味方撲滅を目指す。
- ✓ 社長の想いを現場に伝え、現場の課題を社長自身が認識できるようにするため、社長と部長クラスの間で直接対話「イノベーション・ダイアログ」を実施し、膝詰めでコミュニケーションを図る。様々な取組を通じて、社内文化が徐々にだが着実に変わりつつある。

出典：経済産業省「日本企業における価値創造マネジメントに関する行動指針」より